

学会ニュース

日本ヘルスプロモーション理学療法学会 第9回学術集会の御案内

1. 開催要項

テーマ：新しい時代におけるヘルスプロモーションの役割

日時：令和元年11月3日（日）

会場：医療福祉専門学校緑生館理学療法学科・作業療法学科校舎 3階階段教室

〒841-0074 佐賀県鳥栖市西新町1428-566

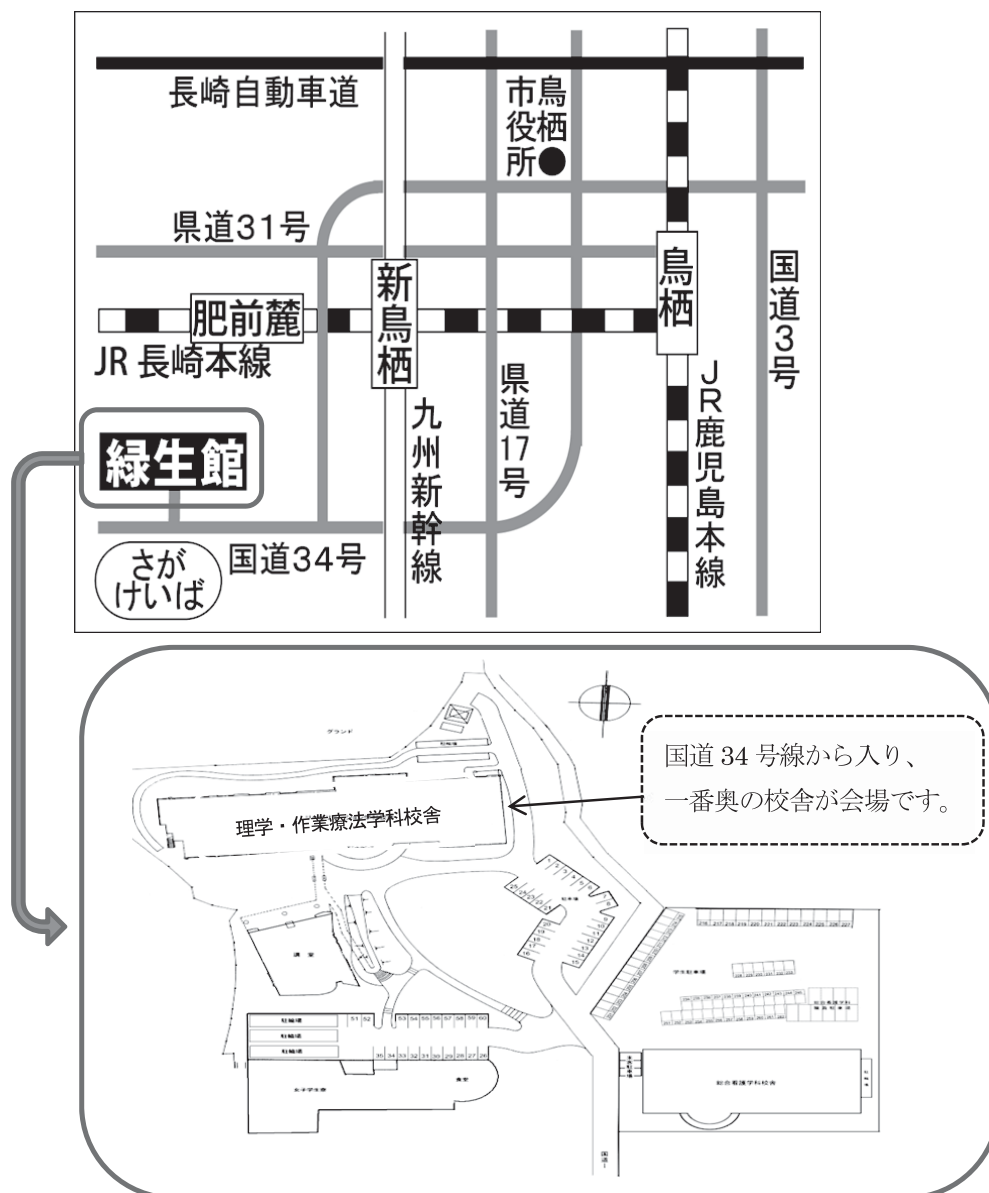
大会長：政所 和也（医療福祉専門学校緑生館 理学療法学科）

参加費：1,000円（弁当代を含む、大学院生・学生は無料）

事務局：医療福祉専門学校緑生館 理学療法学科

TEL：0942-84-5100 FAX：0942-84-0768 E-mail：s.sego@ryokuseikan.ac.jp（*は@へ）

緑生館アクセスマップ



2. 大会プログラム 受付開始 (8:30~)

開会のあいさつ (9:00~9:05)

政所 和也 (日本ヘルスプロモーション理学療法学会 第9回学術集会大会長)

特別講演 (9:05~9:50)

『地域支援におけるこれまでの歩みと今後の期待 -作業療法士の視点から-』

演者: 倉富 眞 (医療福祉専門学校緑生館 副校長)

座長: 大田尾 浩 (西九州大学リハビリテーション学部教授)

一般演題 第1セッション (10:00~11:20) (発表10分, 質疑応答10分)

座長: 山崎 先也 (西南学院大学人間科学部教授)

1. パーキンソン病患者の浮き趾に関する調査研究

弓岡まみ (大阪人間科学大学), 村田 伸, 兒玉隆之, 中野英樹 (京都橘大学),
相馬正之, 佐藤洋介 (東北福祉大学), 村田 潤 (長崎大学), 中江秀幸 (東北福祉大学)

2. 上肢と下肢に対するマッサージが認知症高齢者の脳波活動に及ぼす効果

中野英樹, 村田 伸, 兒玉隆之 (京都橘大学), 平岩和美, 平尾 文 (広島都市学園大学),
中村萌子 (ナカムラ病院),
谷 都美子, 森 郁子 (株式会社ナリス化粧品, 日本介護美容セラピスト協会)

3. 健常男性の背筋力, 身体組成とバランス能力の関連性

平岩和美, 平尾 文 (広島都市学園大学), 吉野明日 (山口平成病院), 西本 瞭 (西条中央病院)

4. 健常成人男性の咬合力と身体組成および身体機能との関連について

平尾 文, 平岩和美 (広島都市学園大学)

総会 (11:30~12:00)

昼食 (12:00~13:00)

教育講演 (13:00~13:45)

『Shoulder Frailty -加齢に伴う肩関節の衰え-』

演者: 甲斐 義浩 (京都橘大学健康科学部准教授)

座長: 政所 和也 (医療福祉専門学校緑生館理学療法学科)

一般演題 第2セッション 14:00~15:00 (発表10分, 質疑応答10分)

座長: 平岩 和美 (広島都市学園大学健康科学部准教授)

5. 6か月間の健康教育が地域在住高齢者に及ぼす効果

大田尾 浩, 八谷瑞紀, 溝田勝彦, 満丸 望, 久保温子, 田中真一, 岸川由紀,
大川裕行 (西九州大学), 田久保順也 (株式会社ミズ), 鎌田 實 (諏訪中央病院)

6. 通所リハビリテーション利用者における転倒予測因子に関する縦断研究

八谷瑞紀, 大田尾 浩 (西九州大学), 村田 伸 (京都橘大学), 井原雄彦, 陣内健太, 森田雅大, 北島貴大 (ひらまつ病院)

7. 手指感覚情報処理時の循環調節能に対する中枢神経障害の影響について

村田 潤 (長崎大学), 古後晴基 (西九州大学), 今村純平 (久留米リハビリテーション病院), 梅木奈穂 (長崎大学)

閉会式 (15:15~15:25)

パーキンソン病患者の浮き趾に関する調査研究

弓岡まみ (大阪人間科学大学), 村田 伸, 兒玉隆之, 中野英樹 (京都橘大学),
相馬正之, 佐藤洋介 (東北福祉大学), 村田 潤 (長崎大学), 中江秀幸 (東北福祉大学)

本研究の目的は、パーキンソン病患者の浮き趾状況を調査し、バランス能力や歩行能力などの身体機能との関連を明らかにすることである。対象は、在宅パーキンソン病患者16名 (男性7名, 女性9名, 平均年齢は 72.4 ± 6.4 歳) とし、足底圧分布測定器 Foot Look (株式会社フットルック) を用いて浮き趾の判定を行った。さらに、各種身体機能を計測し、各項目と浮き趾本数との関連をピアソンの相関分析を用いて検討した。その結果、浮き趾状況としては対象者の87.5%に浮き趾認められた。浮き趾と身体機能との関連については、浮き趾本数が多い人ほど普通歩行速度が遅く、TUGの時間は延長し、足趾把持力は低下した ($p < 0.01$)。これらの結果から、パーキンソン病患者は浮き趾の有症率が非常に高く、姿勢保持・制御に足趾が上手く機能していないことが考えられた。姿勢制御が困難なパーキンソン病患者において、浮き趾を改善することが身体機能の向上につながる可能性があることが示唆された。ただし、本研究は対象者が16名と少なく、stage別や性差の検討はできていない。今後はより多くの対象者で検討を行うことが課題である。

上肢と下肢に対するマッサージが認知症高齢者の脳波活動に及ぼす効果

中野英樹, 村田 伸, 兒玉隆之 (京都橘大学), 平岩和美, 平尾 文 (広島都市学園大学),
中村萌子 (ナカムラ病院),
谷 都美子, 森 郁子 (株式会社ナリス化粧品, 日本介護美容セラピスト協会)

身体に対するマッサージは認知症高齢者の行動・心理症状の改善に効果的であることが報告されているが、その脳内神経基盤に関しては未だ明らかにされていない。本研究の目的は、上肢と下肢に対するマッサージが認知症高齢者の脳波活動に及ぼす効果について明らかにすることである。対象は認知症高齢者17名とし、A群とB群にランダム割付けした。1日目にA群には上肢のマッサージ、B群には下肢のマッサージを施行した。2日目はマッサージ部位を入れ替えて、A群には下肢のマッサージ、B群には上肢のマッサージを施行した。マッサージは各々15分間施行し、マッサージ前後に安静時脳波活動を測定した。脳波の解析にはEEGLABとexact low-resolution brain electromagnetic tomographyを用い、脳内の三次元電流密度分布を推定した。その結果、上肢マッサージ後に前帯状皮質の β 帯域の有意な増加を認め、下肢マッサージ後に島皮質の β 帯域の有意な増加を認めた。本研究により、上肢と下肢に対するマッサージは認知症高齢者の快情動に関わる脳領域を賦活させることが明らかにされた。

健常男性の背筋力、身体組成とバランス能力の関連性

平岩和美, 平尾 文 (広島都市学園大学), 吉野明日 (山口平成病院), 西本 瞭 (西条中央病院)

【目的】背筋力と身体組成がバランスに与える影響を明らかにすることを目的とする。【方法】対象は健常男性30名, 平均年齢 21.9 ± 3.1 歳である。測定には, 背筋力計 (竹井機器 TKK5402), 酒井医療 Active BalancerEAB-100, 身体組成計 (タニタ TBF310) を用いた。背筋力は2回測定し最大値を用いた。重心動揺は閉眼閉脚立位, 開眼右前タンデム肢位, 開眼左前タンデム肢位を各30秒間保持し, 総軌跡長, 外周面積, 左右方向の動揺平均X方向平均中心変位, 左右方向の最大動揺X方向動揺中心変位, 前後方向の動揺平均Y方向平均中心変位, 前後方向の最大動揺Y方向動揺中心変位を用いた。FRT (Functional Reach Test) は立位にて方側上肢 90° 挙上から前方に手指先端を移動させた距離を左右2回測定し, 最大値を採用した。身体組成は除脂肪量を分析に用いた。統計処理にはピアソンの相関係数を用い有意水準を5%とした。【結果】背筋力とFRT ($r=0.42$), 背筋力と除脂肪量 ($r=0.47$), 除脂肪量とFRT ($r=0.46$), 除脂肪量と左前タンデム肢位におけるX方向動揺中心変位 ($r=-0.37$) の相関がみられた。このことより背筋力と除脂肪量はバランス能力と関連が有り, 不安定な肢位において除脂肪量の多い者は左右方向の動揺が小さくなると考えられた。

健常成人男性の咬合力と身体組成および身体機能との関連について

平尾 文, 平岩和美 (広島都市学園大学)

本研究は, 健常の成人男性における咬合力 (噛む力) をはじめとした身体機能の測定を実施し, 咬合力が身体組成および身体機能に及ぼす影響について明らかにすることを目的としている。対象はA大学健康科学部の健常成人男子学生30名 (平均年齢 21.3 ± 3.2 歳) である。測定項目は, 咬合力をはじめ, 身長・体重・握力・背筋力・胸囲・腹囲・除脂肪量とした。得られた結果に関しては, 単相関分析を用いて検討した。倫理的配慮として本人に対して説明を行い, 理解を得た上で研究を実施した。また, 本研究は広島都市学園大学倫理委員会審査にて承認を得ている。単相関分析の結果として, 体重 ($r=0.48$, $p<0.01$), 背筋力 ($r=0.55$, $p<0.01$), 胸囲 ($r=0.51$, $p<0.01$) の3項目に有意な相関が認められた。また, 握力 ($r=0.44$, $p<0.05$) 腹囲 ($r=0.35$, $p<0.05$) 除脂肪量 ($r=0.35$, $p<0.05$) の3項目に弱い相関が認められた。測定項目のうち, 身長にのみ相関が認められなかった。得られた結果から, 健常の成人男性における咬合力は, 体重をはじめとした握力・背筋力・胸囲・腹囲・除脂肪量と関連することが示唆された。この結果を踏まえ, 今後, 幼児や高齢者といった年齢および性別による比較も行いたいと考えている。

6 か月間の健康教育が地域在住高齢者に及ぼす効果

大田尾 浩, 八谷瑞紀, 溝田勝彦, 満丸 望, 久保温子, 田中真一, 岸川由紀, 大川裕行(西九州大学),
田久保順也(株式会社ミズ), 鎌田 實(諏訪中央病院)

本研究の目的は, 地域在住高齢者を対象に運動および栄養に関する健康教育を行い, その介入が身心機能に及ぼす効果について検討することである。対象は, 地域在住高齢者108名(平均年齢 73 ± 7 歳)とした。参加者の希望によりコントロール群(38名, 74 ± 7 歳)と介入群(70名, 72 ± 7 歳)に群分けし, 運動(ウォーキングやスクワット)および栄養指導による介入前後の身心機能を比較検討した。コントロール群と比較して介入群は, 介入後に脂肪量が減少し, 骨格筋量指数, 片足立ち時間, 体力総合得点に有意な向上が認められた。一方, 認知機能, 注意機能, 生活機能, 転倒リスクには有意差は認められなかった。これらの結果から, 運動および栄養に重点を置いた健康教育は, 地域在住高齢者の健康増進に有用である可能性が示された。

通所リハビリテーション利用者における転倒予測因子に関する縦断研究

八谷瑞紀, 大田尾 浩(西九州大学), 村田 伸(京都橘大学), 井原雄彦, 陣内健太, 森田雅大,
北島貴大(ひらまつ病院)

本研究の目的は, 通所リハビリテーション利用者を対象にベースラインとその2年後に身体機能および転倒経験を調査し, 縦断的に転倒予測因子を検討することである。対象は, 通所リハビリテーション利用者20名(平均年齢 78.8 ± 8.4 歳)とした。2年後にすべての項目について調査を行えた14名を分析対象とした。ベースラインと2年後の調査は転倒経験の有無の他, 握力, 大腿四頭筋筋力, 5m歩行時間を実施し, 各測定値の変化率(2 年後測定値 $-$ ベースライン時測定値 $/$ ベースライン時測定値)を求めた。解析は, 2年後の転倒経験を従属変数, ベースライン時の各測定値, 変化率およびベースライン時の転倒経験を独立変数とする多重ロジスティック回帰解析を実施した。その結果, 18名中6名が転倒しており, 多重ロジスティック回帰分析より選択されたのは転倒経験であった($p < 0.05$)。2年後の転倒経験を予測する因子はベースラインの転倒状況であることが明らかとなり, 転倒経験の評価の重要性が示された。

手指感覚情報処理時の循環調節能に対する中枢神経障害の影響について

村田 潤 (長崎大学), 古後晴基 (西九州大学), 今村純平 (久留米リハビリテーション病院),
梅木奈穂 (長崎大学)

脳卒中にともなう身体機能障害では、運動麻痺以外にも50–85%の患者が体性感覚の機能障害を併発すると報告されている。中枢神経疾患に伴う感覚機能の異常は感覚情報処理時にみられる循環調節機能の特性変調に関連するかもしれない。そこで本研究は、脳卒中片麻痺者を研究対象として、手指感覚識別課題遂行時の手指皮膚血流量の応答特性の麻痺側と非麻痺側の差、および触圧覚閾値との関連性について調査した。その結果、手指感覚識別時に手指の皮膚血流が減少するが、その応答量は非麻痺側に比べて麻痺側で少ない傾向が観察された。また、脳卒中片麻痺者の手指の触圧覚閾値と手指感覚識別時の手指血流応答量との間には正の相関関係が認められ ($r=0.43$)、血流量の減少反応が大きいほど触圧覚の感覚感度が高いことが判明した。これらの研究成績は、脳卒中に伴う皮膚の感覚障害は感覚識別時の循環応答特性の変化に反映する可能性を示唆する。